世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『街の子ピーター』

第 15 話

制作　日本アニメーション
　　　フ ジ テ レ ビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第十五話「街の子ピーター」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ピーター
ベッキー
アーメンガード
ロッテイ
ラビニア
ジェシー
ガートルード

モーリー

ジェームス

野菜売りの主人

婦人A

婦人B

エミリー（人形）

シーザー（猫）

1 ミンチン女学院・屋根の上（朝）

朝日が射し、すずめたちが、さえずり舞っている——

2 同・屋根裏部屋（朝）

ベッドで、アーメンガードのくれた本を開いたまま、うたた寝していたセーラ、すずめの声に、はっと眼をさます。

セーラ「いけない。私、昨夜、本を読んでいるうちに眠ってしまったんだわ」

ベッドを降り、粗末なテーブルに行くと、本を置き、飾ってある父母の写真と、エミリーに挨拶する。

セーラ「お早う、お父様、お母様……それから、お早う、エミリー」

ふと、エミリーの脇に、ロッティのくれた焼物の小馬

と並んで置いてあるオカリナに気づき、取り上げる。

3

フラッシュ（十一、十二話）

誕生パーティで、おずおずとセーラにオカリナをプレゼントするピーター。

×　×　×

セーラの部屋から、モリーに引出されるクビになったピーター。

4

同・屋根裏部屋（朝）

じっと、そのオカリナをみつめるセーラ。

セーラ「（呟く）ピーターは、あれからどうしているのかしら……」

またひとしきり、すずめの声――

天窓を見上げたセーラ、テーブルの小さな紙包をとり、
木箱の上に上ると、天窓を押し上げる。

5

同・屋根の上（朝）

天窓から、顔を出すセーラ。
——すずめたちが、ぱっと舞い立つ。
セーラ「お早う、すずめさんたち……驚かなくてもいいのよ……さ、
パンくずを貰っておいてあげたわ」
紙包みのパンくずをまく——続いて、オカリナを吹い
てみせる。
——すずめたち、次第に舞い戻り、パンくずを喰べに
集って来る。
微笑を浮べるセーラ——
その時——近くの教会で鐘の鳴る音。

セーラ「そうだわ……今日は、日曜日だったのだわ」

6

同・屋根裏部屋（朝）

天窓を下げ、木箱を降りるセーラ、ベッドの壁に行く
とノックする。

セーラ「ベッキー！……ベッキー……！」

7

同・ベッキーの部屋

ガバと跳ね起きるベッキー。

ベッキー「は、はい、お嬢様、お早うございます……」

8

同・屋根裏部屋（朝）

セーラ「（微笑）お早う、ベッキー」

9

同・三階の廊下（朝）

奥の扉の前で眠っていたシーザーが、眼をさまし、大きくノビてあくびをする。
その扉が開き、セーラと眠そうなベッキーが出て来る。
シーザー、ひと声啼くと、偉そうに先導する。
顔を見合せたセーラとベッキー、まだ寝静っているミンチンの部屋の前をそっと階段に切れる——

10

同・ミンチンの寝室（朝）

ベッドから起上るナイトキャップのミンチン、醜く大あくび——はっと口を押え、枕許の眼鏡をかけると、

ベッドを降り、壁の呼び紐を引く。

11 同・アメリアの部屋（朝）

チャランチャラン、と、ベッドの頭上の鈴が鳴る――
はね起きるアメリア。
アメリア「は、はい、お姉様、起きています」

12 同・台所（朝）

もうもうと湯気の上る大鍋――をかきまわすジェームス。

× × ×

セーラの前に、仁王立ちになったモリー、
モリー「いいかい、日曜日だからって、ゆっくり休めると思ったら

大間違いだからね、お前は早く玄関の掃除をするんだよ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

傍で心配そうに見守るベッキーに、

モリー「ベッキー、なにをグズグズしてるんだよ。お前は早く食事の手伝いをおし！」

ベッキー「は、はい……」

13

同・玄関前（朝）

横手の地下からの階段を――重い水桶を両手で提げたセーラが、一段一段上って来る。

×　×　×

玄関の石段に来ると、水桶を置き、膝をついてブラシで敷石を洗いはじめる。

――ふっとその手が停る。

14 フラッシュ（七話より）

セーラと同じように、敷石をはいつくばって洗うベッキー。

15 同・玄関前（朝）

セーラのM「今の私は、あの時のベッキーと同じなのだわ……でも、耐えて行かなくては……」

セーラ、再び敷石を洗い出す――

16 同・二階の廊下（朝）

三階から降りて来るアメリア、振鈴する。

アメリア「皆さぁん、礼拝に行く時間ですよォ……起きて下さァい

……」

17 同・ラビニアたちの部屋（朝）

素早くベッドに起きるラビニア――

×　　×　　×

大あくびで起上るジェシー。

ジェシー「フワッフワッ、フワッ……」

×　　×　　×

眠そうに起上るガートルード。

ガートルード「わァ、もう朝ァ。まだ寝たいのにィ……」

×　　×　　×

一隅でまだ眠っているアーメンガード。

ラビニアが、つかつか近づくと

ラビニア「アーメンガード……起きなさいってば、ねぼすけ！」

両手でシーツごと引きはぐ。
アーメンガード「うわァ……」
もろに毛布と共にベッドから転げ落ちる。
どっと笑うラビニアたち ——

18 同・玄関前

——敷石洗いを続けているセーラ。
玄関のドアが開き、外出姿のドルシア、ダイアナ、ジェニファ、クリステル、リンダが出て来る。
——一瞬、顔をあげるセーラ。
はっと見るドルシアたち。
——セーラ、急いで水桶を横に移す。
気の毒そうに顔を見合せたドルシアたち、囁きながら前の集合場所へ。

×　　　×　　　×

続いて出て来るラビニア、ジェシー、ガートルード。

セーラに眼をとめ、冷笑で顔を見合せる。

――水桶を片附けようとするセーラの背。

ラビニア、いきなり石段を降りざまセーラの背を押す。

セーラ「あッ……」

水桶ごと引っ繰り返り、全身ぬれねずみ。

行き違ったラビニア、きっと振返る。

ラビニア「なによ。自分で転んだくせに、私のせいにする気？」

――激しくラビニアを見るセーラ。

ラビニア「大体通り道で邪魔してるからいけないのよ。ねえ」

ジェシー「そ、そうよ、そうよ」

ガートルード「ウフ、いい気味……」

追従笑いでラビニアと集合場所へ。

×　　　×　　　×

——怒りを耐えて水桶を起すセーラ。

出て来るアーメンガード、はっと見る。

アーメンガード「セーラ……」

——振向いて微かに首を振るセーラ。

セーラ「（低く）大丈夫よ、アーメンガード」

アーメンガード「で、でも、そんな……」

× × ×

集合場所で、ラビニアが呼ぶ。

ラビニア「アーメンガード、早く並ぶのよ！」

× × ×

セーラ「さ、私と話してると何か云われるわ、行って」

アーメンガード、続いて出て来た年少組のペネラビたちと、仕方なく集合場所へ。

× × ×

一人遅れて出て来るロッティ、はっとセーラの姿を見

て、忽ち泣顔になる。

ロッティ「セーラ・ママ……」

その時、足早に近づくラビニア。

ラビニア「ロッティ！　セーラに話しかけちゃいけないって、院長先生に云われてるの忘れたの。さ、早く並びなさいよ！」

ロッティの耳を摑んで引立てる。

ロッティ「わァン……痛いよう……」

泣きながら連れ去られるロッティ。

――じっと耐えて見送るセーラ。

そこへアメリアと、出て来るミンチン。

セーラ「（思わず出る）院長先生……」

ミンチン、ジロリとセーラを見る。

セーラ「あの……お仕事を終ったら、私も礼拝に行っていいでしょうか」

ミンチン「なんですって？……お前は、そんな立場ではありません

！」

絶句するセーラ。

哀み見るアメリア。

ミンチン「ラビニア、みんな揃いましたね」

ラビニア「はい、院長先生……」

ミンチン「よろしい。では出発させなさい」

ラビニア「はい、院長先生」

ラビニアを先頭に、泣顔で続くロッティ。

ドルシアたちに続き、セーラを振返りジェシーに突き飛ばされるアーメンガード。

最后に続くミンチンとアメリア――

×　×　×

鉄柵の脇で、じっと見送るセーラ。

×　×　×

通りかかった婦人たちが、セーラに気づかず、行列を

見送って囁き合う。

婦人A「まあ、ミンチン女学院の代表生徒さん、また変ったのね」

婦人B「ほんと。でも、あの子、前に代表だった意地悪そうな子よ」

× × ×

セーラの耳に、婦人たちの声がかぶる。

婦人Aの声「だけど、どうしたのかしら。あのプリンセスみたいな生徒さん」

婦人Bの声「きっと、国王のお父様に呼ばれてお帰りになったのよ。きれいで気品のある方だったのにねえ」

× × ×

去って行く婦人たち――

じっと唇を嚙んで立尽しているセーラ。

地下の階段から、モリーが上って来る。

モリー「お前、なにボウッとしてるんだよ。掃除が終ったら報せに戻らなきゃ駄目じゃないか」

セーラ「あ、すみません」
モリー「お前には、まだまださせる仕事があるんだからね。来るんだよ」
セーラ「はい、モリーさん……」
セーラ、水桶を提げ、モリーに従う。

19 同・台所

セーラの前に、ジェームスとモリー。
ジェームス「いいな。丁度そろそろコベントガーデンの市場が閉る頃だ。そこを狙っていい野菜を安く仕入れて来るんだぞ」
一方のベッキーが心配気に出る。
ベッキー「あの、買い出しなら、私が……」
モリー「お前は引っ込んどいで。この子はなんにでも使うように、

院長先生に云われてるんだからね。買い出し位出来るだろ」

セーラ「はい、やってみます」

モリー、セーラに紙片を渡す。

モリー「要る野菜を書いといたからね。それ以上の値で買うんじゃないよ」

セーラ「は、はい……」

ジェームス「全部で幾らになる」

セーラ、紙片を見て、素早く暗算する。

セーラ「二シリングと十三ペンスです」

驚いてモリーと顔を見合せるジェームス、両手の指を折って確め、頷く。

ジェームス「合ってるようだぜ」

モリー「フン、今までお嬢様で勉強して来ただけの事はあるだろうよ」

ジェームス「全くだ。そこへ行くとベッキーの奴と来たら、買い出

しのたびに釣をまちがえて来やがって……」

ベッキー「す、すみませんです……」

モリー、セーラに銀貨三つを渡す。

モリー「さ、これだけ渡しとくからね。お釣を落したりしたら承知しないよ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

20 同・地下の階段下

心配そうに籠をセーラに渡すベッキー。

ベッキー「お嬢様、ほんとにお一人で……私、心配で心配で……」

セーラ「有難う、ベッキー……ほんの少し心細いけど、行ってみるわ」

21 同・表

籠を手に、地下の階段を上って来るセーラ、通りへ歩き出す。

そのあとから上って来るベッキー、心配気に見送る。

ベッキー「お気の毒なお嬢様……」

――トボトボと遠去るセーラの姿。

――C・M――

22 街路

籠を抱えたセーラが来る。
突然、横合いから吠えかかる野良犬。
脅えて立尽したセーラ、そっと廻り込む。

23 洋服店の前

来かかるセーラ、はっと立停る。
左右のウインドに飾られた美しい服。
その間の「CLOSE」の札のかかった暗いガラス戸に
——写っているセーラのみすぼらしい姿。
セーラ、吐息して歩き出す。

24 高架の下

轟音と共に煙を流して通過する蒸気機関車と貨車——

——その下をセーラが来る。

25 小さな教会の前

鐘が鳴り、近隣の親子連れが礼拝に入って行く。

来るセーラ、足を停めて、同年の少女の姿を見送る——

26 テームズ河の全景

鐘の音が聞え、ウオータールー橋の彼方に、セントポール寺院が見える。

27 ウオータールー橋

渡って来るセーラ——行き交う馬車の車輪に、危く欄干に身を寄せる。

28 同・橋のたもとの階段

降りて来るセーラ、ふっと立停る。

× × ×

——眼前に聳えるあの「ホテル・サボイ」

× × ×

セーラ「（呟く）インドから来た時、お父様と泊っていたホテルだわ」

29 イメージ

華麗なオーケストラがかぶり——エンバンクメントを

行くセーラと父親の乗った馬車の想い出の数々。

30 同・橋のたもとの階段

一瞬、オーケストラが絶え、立尽しているセーラ――

セーラ「（呟く）あの時とは、もう違う……私はメイドなのよ」

吐息して階段を降りはじめるセーラ。

31 コベント・ガーデン市場の風景

買出し人たちの退いた閑散とした市場。

32 同・一角

空の荷車や、野菜くずの山――

探しながら来るセーラ、立停ると、ポケットから銀貨を取り出し、改める。

突然、背后から走った少年の影が、どっとセーラに体当りする。

セーラ「あッ……」

突ンのめって泥道に転がるセーラ、手の銀貨三つが路上に飛び散る——同時に、背后から走り寄る少年たちの足、足。

それぞれの手が、散った銀貨二枚を続けざまに拾い、だっと走る。

必死に起上るセーラ——追う。

セーラ「あ、待って……！」

行手を逃げる三人の少年たちの後姿が、素早く曲り角に消える。

33　同・曲り角

追って来たセーラ、見廻す。
既に、少年たちの姿はない。
茫然と立尽すセーラ、急いで引返す。

34　同・一角

駆け戻って来るセーラ、辺りを探す。
はっと気がつく――
――泥の中に、一つ残っている銀貨。
セーラ、急いで拾い、辺りを見廻す。
――だが、他に落ちている銀貨はない。
茫然と立尽すセーラ、絶望がこみあげる。
セーラ「ど、どうしよう……あのお金がなかったら……」

35 フラッシュ

威丈高にセーラに決めつけるモリー。

モリー「……お釣を落したりしたら、承知しないよ！」

36 同・一角

セーラ「まだ、買物もしてないのに……」

その時、一方から野菜くずを山積みにした掃除人の荷車が押されて来る。

声「どいた、どいた……」

セーラ、はっと脇に避ける。

通り過ぎようとした荷車が、突然停り、声が飛ぶ——

声「お、お嬢様じゃありませんか」

セーラ、見て愕然となる。

荷車を押して来た少年は、ピーター。

セーラ「ピーター……！」

ピーター「ひゃあ、驚いたなあ。一体なんだって、そんな恰好で、
　こんな場所へ……」

　セーラ、首を振る。

セーラ「ピーター……訳はあとで話すわ……それより私、買物に来
　て、お金を……」

ピーター「えっ。誰かに盗られたんですか」

セーラ「い、いえ……落してしまったの」

ピーター「落した？」

　怪我そうに見たが、

ピーター「お嬢様……この辺りは、お金なんか落したら、出て来っ
　こない所なんですよ」

セーラ「え、ええ……私が、ボンヤリしてたからいけなかったの」

ピーター「それで、買物って……」

セーラ、急いで紙片を渡す。

セーラ「野菜をこれだけ……でも、手許には一シリングしか……」

ピーター、紙片を見ていたが顔を上げる。

ピーター「ようし……お嬢様、ちょいと無理かも知れないけど、当ってみましょう」

セーラ「え、当るって?」

ピーター「ま、任しといて下さい」

37 同・野菜売りの店の前

後片づけの売り子達——一角で、ピーターとセーラの前に、渡された紙片から顔をあげる主人。

主　人「おいおい、ピーター……これだけの野菜をたった一シリングで揃えろってのかい」

ピーター「頼むよ、おじさん。今度、お店の掃除タダで引受けるか

らさ」

主　人「ううむ、参ったな。お前にそう云われちゃ……よし、もう店じまいだ。思い切って負けとこう」

ピーター「わァ、有難う、おじさん」

セーラ「有難うございます、ご主人……」

主　人「なあに、ピーターの知り合いと来りゃ、この位のサービスしてあげなきゃな」

ピーター「あ、それからお釣が要るんだ、この一シリング、受け取っとくよ」

ポンと銀貨を抛り、受け取る。

主　人「ええッ……そ、それじゃ、まるっきりタダじゃねえか」

ピーター「エへ、恩に着るからさ、ご主人」

主　人「こ、こいつ。お前にゃ負けたぞ」

笑う主人。

ピーター、ニヤリとセーラに片眼をつぶってみせる。

ほっとなるセーラ――

38 同・市場の外

山盛りの野菜の籠を抱えたピーターと出て来るセーラ。

セーラ「有難う、ピーター……私、あなたに逢わなかったら、一体どうしていいか……」

ピーター「いえ、この位、今までお世話になった事を想えば、当り前ですよ……それよりお嬢様、どうしてこんな事に……」

セーラ「ええ……お話するわ、ピーター」

39 ウオータールー橋の上

――遠くセントポール寺院の鐘の音。

×　×　×

欄干で、じっとテームズをみつめるピーターとセーラ。

ピーター「……そうだったんですか……オレ、お嬢さんの事が心配で、何度もあの学校の前まで行ったんだけど……礼拝の生徒さんの中にも、お嬢様の姿は見えなくなっちまったし、きっと学校を辞めさせられて、どこか遠くへ行ってしまったのかと……」

セーラ「ごめんなさい、ピーター……私の為に、あなたも随分生活が変ってしまったんでしょう？」

ピーター「なあに、昔に戻っただけですよ。あの市場で掃除をしたり、店番を頼まれたり、使い走りをしたり……」

セーラ「ピーター……あなたって、とても強いのね」

ピーター「へへ、オレみたいな育ちのもんは、それでなきゃ、父さんや母さんを養って行けないんですよ……学校も、三年でやめちまったし……」

セーラ「私と同じね」

ピーター「えっ……お嬢様と？」

セーラ、はじめてピーターを見る。

セーラ「ね、ピーター、もう私をお嬢様って呼ぶのやめて……私、もうお嬢様でも生徒でもないの。働かなきゃ食べさせて貰えないメイド代りなのよ」

ピーター「お嬢様……」

セーラ「セーラって呼んで……その方が、今までよりずっとお友だちらしくなれるわ」

ピーター「そ、そんな、まずいですよ、お嬢様を……」

セーラ「セーラよ。さ、セーラと呼んで」

ピーター、ためらったが、必死の思いで。

ピーター「じゃ……セ、セーラ……わあ、云っちまったァ」

セーラ「（微笑）ね、ピーター……これでもう私たち、お友だちよ……いえ、私にはあなたが大先輩だわ。だって私、今まで世の中の事をまるで知らなかった事が判ったんですもの」

ピーター「そ、そりゃ、世の中の事は、オレの方が少しは知ってるかも知れませんけど」
セーラ「教えて、ピーター……私、もっと強く生きたいの。いえ、強く生きて行かなければならないのよ」
ピーター「セーラ……」
——ボウッと下流で船の汽笛が鳴る。

40 小さな教会の前

来るセーラ、ピーターから籠を受け取る。
セーラ「有難う、ピーター、もうここでいいわ」
ピーター「でも……」
セーラ「大丈夫……ね、ピーター、私、考えたのだけど、今度、町で逢えた時、少しづつ二人で勉強しない」
ピーター「ひゃあ、オレに勉強教えてくれるんですか、やったァ」

セーラ「じゃ、ピーター」
ピーター「セーラ、オレもなにかあったら、いつでも応援しますから」
セーラ「有難う、ピーター」
ピーター、黙えると駆け去って行く。
微笑で見送ったセーラ、ふと教会を見ると、歩を向ける。

41

同・教会の中

入って来るセーラ、籠を置くと人影のない一隅の席につき、礼拝する――
セーラ「……神さま、ピーターと逢わせて下さった事を、心から感謝致します……」

× × ×

一角に、じっとみつめる老司祭の姿。

42 ミンチン学院前のスクエア

重い籠を抱えて帰って来るセーラ、はっと立停る。

一方からラビニアを先頭に帰って来る女生徒たちとミンチン、アメリアの姿――

× × ×

立尽すセーラを見流して、次々に脇を通って行く得意気なラビニア、泣顔のロッティ、心配顔のアーメンガード、冷笑のジェシー、ガートルード、そしてジロリ見るミンチンと気掛りそうなアメリア。

43 ミンチン女学院・表

その行列が次々に玄関に消えて行く。

×　　×　　×

遅れて地下への階段を降りて行くセーラ。

44 同・台所

籠の野菜を吟味するジェームスとモリー。

ジェームス「ふむ、初めてにしちゃ、仲々いい品物を択んで来たな」

モリー「お釣りは忘れてないだろうね」

セーラ「はい……（銀貨を渡す）」

ジェームス「こりゃベッキーより、よっぽどましだぜ」

モリー「ほんとだよ。うまく値切って来たらしいし……（囁く）これで三ペンスは貯金出来るよ」

ニヤリと銀貨を納める。

一隅から、ほっとセーラと顔を見合せるベッキー。

45

ロンドンの夜景

——セーラの声がかぶる。

セーラの声「そうなのよ、ベッキー……あの時、ピーターに助けて貰えなかったら…」

46

ミンチン女学院・屋根裏部屋（夜）

オカリナを手に、ベッキーに話し続けるセーラ——

セーラ「……私、一体、どうなっていたか知れなかったわ」

セーラのセリフがしぼられ、話続けるセーラとベッキーの姿に、声がかぶる。

セーラ「その夜、私は、ピーターに再会出来た嬉しさを、夜の更けるまでベッキーに話し続けていました……」

おわり